



【国語】

2017年11月実施 大学入学共通テスト 試行調査結果報告の注目点



昨年11月に実施された試行調査の結果が3月末に公表されました。国語のテストではいくつかのポイントがありますが、ここではその中で最も大きなポイントといえる記述式問題の結果について注目します。

記述式問題は第1問に配置され、問1～3の3問で構成されています。
問3の解答の割合に注目します。

〈参考〉問3の設問文

		解答類型	割合 (%)
問3	ア	条件①～④のすべてを満たしている解答	0.7%
	イ	条件①,③,④を満たしている解答 (②のみ満たしていない) 又は 条件②,③,④を満たしている解答 (①のみ満たしていない)	0.1%
	ウ	条件③,④を満たしている解答 (①,②は満たしていない)	0.0%
	エ	条件①～③を満たしている解答 (④のみ満たしていない) 又は 条件①,②,④を満たしている解答 (③のみ満たしていない)	11.1%
	オ	上記以外の解答	81.6%
	カ	無解答	6.6%

空欄イについて、ここで森さんは何と述べたと考えられるか。次の(1)～(4)を満たすように書け。

(1) 二文構成で、八十文字以上、百二十文字以内で書くこと(句読点を含む)。なお、会話体になくてもよい。

(2) 一文目は「確かに」という書き出しで、具体的な根拠を一点挙げて、部活動の終了時間の延長を提案することに対する基本的な立場を示すこと。

(3) 二文目は「しかし」という書き出しで、部活動の終了時間を延長するという提案がどのように判断される可能性があるか、具体的な根拠と併せて示すこと。

(4) (2)・(3)について、それぞれの根拠はすべて【資料(2)】～【資料(5)】の中から選ぶこと。

アが完全な正答を指しますが、この割合は全体の0.7%にとどまりました。問1のアが43.7%、問2のアが73.5%であることと比べると、特別低いことがわかります。

原因は様々に推測できますが、ここでは以下のようにまとめてみました。

- ・ 問1、2が部分抜き出し的な問題であるのに対し、問3は複数の要素をまとめて答える必要がある問いであること。
- ・ 問1が50字以内、問2が25字以内で答えるのに対し、問3は80字～120字以内と長文で答える問いであること。
- ・ 問3には解答に際し4つの条件が設定されており、生徒があまり慣れていない形式の問いであること。

試行調査を受けた生徒へのアンケートでは、大半の生徒が問題量が多く、難度が高かったと回答していますので、今年11月に行われる平成30年度の試行調査では難易度などが調整されることが予測できます。しかし、今回の結果から、記述式問題については、以下の練習が必要になると考えられます。

「複数の要素を読み取る」練習 「120字程度を記述する」練習 「条件が示される問題を解く」練習



英文校閲者のひとりごと⑩

桐原書店の英文校閲担当者（アメリカ出身、在日歴長め）が日本で感じたちょっとしたことをつぶやきます。



Is April really the “cruellest month”?

In one of the most famous poems in the English language, T. S. Eliot writes, “April is the cruellest month.” I’ve often wondered what that means. At first glance, one might think this line has nothing to do with Japan, where April is a time of new beginnings.

Everything seems to change overnight, and to many, it can all be overwhelming. New shops pop up suddenly, students eagerly await the new school year, employees fresh out of school start their new jobs. The term **shinseikatsu**—literally “a new life”—is typically Japanese and heard throughout the month.

The “cruelty” of April, I suspect, at least in the Japanese context, lies in the shared awareness that this “newness” is always short-lived, as ephemeral as the blossoms on the cherry trees.

In the midst of this temporary excitement, those of us who were born in the Showa era may feel a bit envious of the younger folks. But the glories of April eventually do fade, and I am reminded of the last words of the 1970 American war movie **Patton**: “All glory is fleeting.”

Even so, somehow I believe that we need not confine all our glory to a certain season or time of life. It can come at any time, and if we choose to welcome it, new glory will manifest in due course.



筆者が描いた日本の春の風景

日本語訳 4月は本当に「最も残酷な月」なのか

T. S. エリオットは、英語で書かれた最も有名な詩の1つである彼の作品の中で「4月は最も残酷な月である」と書いています。これはいったいどういうことなのだろうと、私は常々不思議に思っていました。一見ただけでは、この文は日本にまったく当てはまらないように思われるかもしれませんが。この国では、4月といえば新たな始まりの時期なのですから。

4月になると、いろいろなことが一夜にして変わってしまうようで、それについていけない人も多いかもしれません。突然いくつもの新しい店ができ、学生たちは新学期を心待ちにし、新卒の社会人たちは新しい職場で働き始めるのです。「シンセイカツ」とは文字通りには「新しい生活」のことですが、日本語に特有の表現であり、4月の間じゅう耳にします。

4月の「残酷さ」というものは、これは私の推測なのですが、少なくとも日本の文化的背景においては、その「新鮮さ」が常に短命なものであるという共通認識に根ざしているのではないのでしょうか。ちょうど桜の花のように。

この一時的な高揚感の中で、私たち昭和時代に生まれた人間は、若い世代をちょっとうらやましく感じるかもしれません。しかし、華々しい4月はいずれ間違いなく色あせるわけで、私には1970年公開のアメリカの戦争映画『パットン大戦車軍団』での最後セリフ、「栄光とは移ろいやすいものです」という言葉が思い浮かびます。

たとえそうであるにしても、どうも私には自分が輝く時期を、特定の季節や人生のある時期に限定する必要はないと思えるのです。それはいつだってやって来るかもしれないし、私たちがそれを迎え入れる気持ちさえあれば、新たな輝きはやがて訪れることでしょう。

